

『歎異抄』について

真宗大谷派・同朋大会講演

「不來方の お城の草に寝ころびて 空に吸われし
十五の心」

これは古い歌ですけれどもかえって若い方々のほうが
ご存じの歌でしょうかね。お年寄りの方もおなじみがご
ざいますか。

不來方のお城というのは盛岡城ですね。あのお城の上
で、今とはだいぶ違っていきましょうが、数十年昔の、啄
木さんの中学生の頃なのでしよう。十五才の青年が昼休
みに学校から抜けて行ってお城の草むらの上に仰向けに
なって空をズーツと見上げています。いつの間にか、ズー
ツと青々した空が上から目の前に落ちて来るように思っ
ているうちに、体のほうがなんだかズーツとあの青空の
中に、限らない青空の中に吸われ込んで行くような気持
これは私どもも子供のころを思うとそういう覚えがござ
いますね。

これは今度は逆に、お年寄りの方はみな懐かしい思い
出があると思います、いまの若い人はかえってこういう

思い出がないのではないのでしょうか。伺ってみたいと思
いますが、どうでしょうか。あの限りなく広々とした奥
知れない無限の天空の中に、自分の心がズーツと吸い込
まれてひとつになっちゃってしまおう、そういう気持。

私もだんだん歳と共に世の中をさすらうているうちに、
空を見上げる機会をつい忘れてしまつて、このごろにな
つて妙な話ですけれども、この天空を思いますが何だか
あの底知れない、限りないどこまで行つてもどこで尽き
るのか分からないあの奥深さ、無限と言いますか、永遠
というものの中にいつかは吸い込まれて行くだろう私の
いのちがなんだか不安で仕方ない。

どうも他のことは何とか世の中の知恵才覚で一応片付
けられそうなんですけれども、最後に残ったこの自分の
いのちの行く末が、あの永遠の中に溶け込んで行くとロ
マンチックに子供の時なら思えたかもしれないけれども、
いまこの歳になつてどうもそれが怖くなつています。なん
だか思い切つてそこにズーツと入つて行けないような気
がする。私だけのことかも知れませんが、そういう果て
知らぬものの中に、自分のこの七十年の生命が消えてい
くということが、どうも不安でしようがない。勇み心が
出て来ない。

その啄木の歌は、我々の肉体のほかに真実のいのちというもの、そういう真実のいのちに憧れる、あるいは真実のいのちを自分のものにしたという願い心の表れだろう、だからそういう真実のいのちを自分のものにしたという真実のいのちへの願いの心だから・まあまあと言つて、ある人は慰めてくれるのですが。あるいは励ましてくれるのです。

なにかその死ななければならぬ私のいのちが、同時に死ということのない永遠のいのちとの関係で。自分の死ということがわかつているように思いながら、本当に死なないいのちがあるということ、死のない世界というものがあることがはつきりわからないものだから。わからないということとは私自身の死ぬということも実ははつきりわかつておらないことだろう、そう言われていることになるだろうと思うのです。

わかつているようで、わかつておらないのが私自身の死ぬということ。言い換えれば、本当に死のない世界というものがわかつておらない。

私のいのちは有限の七十年八十年きりのいのちですが、それがそのまま永遠のものであつて欲しい。我々の現在がそのまま永遠であつて欲しい。未来ではない、永遠は

未来の方に永遠があるでは困る。いまこのままこの私の七十年を離れないでそのまま永遠であつて欲しい。永遠でひとつであつて欲しい。そこに単なる七十年八十年の人間生活だけではなしにそれを超えたもの、超えたというと離れたことになりそうですが、それと離れないでそれとひとつに永遠な、あるいは無限ないのちというものがあると。それが離れないということがそれが宗教生活なのだ。こういうようにある人は慰めてくれる。

永遠と私のいのちというものが、絶えず永遠から私のいのちへ、私のいのちがそのまま永遠へ、永遠と私のいのちとの間が瞬間瞬間に通いあつている。私のいのちは滅んでいくいのちであるかも知れないけれども永遠のいのちは逆に新しく生命をつくりあげていくいのちである。いのちを造りあげるところにひとつの大きな願いがある。私のいのちがその願いと触れ合いながら私のいのちの上とその願いがその新しいいのちをつくり上げていつて下さる。そこにこの世を離れないで、限りないいのちの世界との生きた交流がある。話が抽象的のようになりましたが。

ちょうど今選挙の時期で、このお寺さんは大分周囲から離れているようで、非常に静かで有難い所なのですが、

大通りや国道何号線筋というような所におられる方は朝から晩まで街頭の呼び声に非常にお賑やかなことと思えます。あれは非常にご苦勞なことですね。我々に代わってこの世のいろいろな難しい問題を自ら進んで引き受けてやろうと言って下さる。引き受けさせてくれと言って大声で叫んでいって下さる。それは非常に有難い。

あのお声はこの世間の中で、世間へのお声である。世間に向かつて声を囁らしていのちの限り、それこそ命懸けでやりますとおっしゃっております。自分の全身全力をなげうってとはつきりおっしゃっておりますが、それがこの世へ、この世間に向かつてのお声である。けれども欲を言えば、そのお声の後ろに、後ろの聲が聞こえるか。後ろからの聲があのお声の中に入って来ているかどうか。入って来ていないとすると、言うことがなんだか寂しい気がする。非常に有難いとは思うのですけれども、有難いと思うけれども、なんだかそこにもう少し物足りないような、本当に自分自身の、私なら私のいのちもその中に一緒に溶け込ませてもらえらというようなそういう響きがないような気がする。と申しては甚だ失礼かも知れませんが、世間の中での声であり、世間への声である。世間とひとつになっている、世間を超えたものからの声、

あるいは世間を超えたものに向かつての声の反響だとはどうも思えないようである。

先程申しました、生きるということ。このいのちの消えて行く恐ろしさ。いのちが惜しいということ、惜しいならまだいいけれども、なんだか恐ろしい。思い切ってそちらへ進んで行けない。

一口に言って煩惱と言われるようですが。つまり人間の歴史はご承知のように地球が出来上がってから四十億年とか数十億年。その中に人類とでも称すべきものが出来てからは約百万年とか言われる。あるいは学説で多少変化があるようですが、百万年のうちで人間としての文化が出だしてからは数万年だということのようですね。その数万年の間に人間の本性、言い換えれば人間としての目覚め、人間が人間であるという目覚め、これは他の動物には多分ないのでしょうが、その目覚めた人間性というものはこの数万年間本質的には少しも変わってはおらない。

まあそう言えば、毎年の選挙の声をそういう意味で聞いてみますと、選挙は単に十日とか二十日とか一ヶ月とあるいは百年も前から、あのお声はいろいろの形をとって、

ああいうように人間の本性上、ああいう声がズーッと続いて来ているのではないでしょうか。あるいは又これからもこういうことがある度にまた同じ声が、同じ叫びが街頭に溢れて行くのではないのでしょうか。えらいこれは悲観的なような事を言うようですが、まあそういう気持ちもしないでもない。

人間性はこの数万年間ほとんど本質的には変わっておらないと言われている。さらに人類以前のいろいろな数限りない生物進化の各段階を考えてみると、その各段階におけるいろいろな生物の生命の内容、あるいはそのエネルギー、そういうものが次から次へと生物の形を変えながらいま結局我々人間にまで伝わって来ているとするならば、そういうものが潜在力として各生物の生命の数万年数十万年の生物の生命のエネルギーの内容が、ズーッと現在我々の人間のいのちの中身に潜在力として入っているのではないのでしょうか。

これはよく私にはわかりませんが、仏教では阿頼耶識、我々の意識の底、自覚の意識のまだ底、阿頼耶識という中にそういう一切の過去のエネルギーの内容が蔵せられている、蓄えられていると、こう言われているようです。そうしてみるとそういう無限に、なんとも名状する

ことの出来ない長い長い生物の生命の中身が、現在結果として街頭に満ち溢れているわけですから、街頭じゃない我々自身の内にしっかりあるのですから。

妙な言い方ですけれども、煩惱と言いますのはこれはみんな悪いものだというふうに普通思われているようですが、これは私だけの考えかも知れませんが、煩惱というのはそもそも最初の煩惱というものが出来上がったころには、決して悪いものではなかったのではないかと気がするのです。誰かそのようなにお考えになりませんか。つまり煩惱にもそれぞれ、いのちがいのちとして伝わって行くために必要があったから、いろいろな煩惱が出て来たのである。

まあ早い話が煩惱は、たとえば腹を立てる、怒るとか、あるいは物惜しみするとか。しかし腹を立てるのはやっぱり腹を立てるだけの必要があるのですね。物惜しみするにも物惜しみするだけの、あれも欲しいこれも欲しいとこうみんな欲張るといふことも、欲張るといふと聞こえは悪いようだけれども蓄えるのである。蓄えなければいのちがつかない。そういう意味で貪、瞋、痴、そういう煩惱も、本来はその煩惱が誕生したころには、煩惱の赤ちゃん時代には、みなかわいい煩惱じゃなかった

のだろうか。

事実それが現れて、我々も赤ちゃんのお守りは、赤ちゃんが少々駄々をこねても誰もそうは怒らないですね。かえって可愛い可愛いという。だんだん三つ四つになって来ると、いかんとか、そういうことをしてはいけないとか、お前は良くない子だとか、ときにはピシヤツとたたいたりすることもある。

それを長い人類の歴史の中にもって来ると、現在の我々の阿頼耶識の内容は煩惱で一杯なのである。もうその処置がつかない。整理がつかない。長い間の無限の煩惱がここに一杯入っていますから整理がつかない。整理がつかないで各々それぞれの立場を出そうとするものから、煩惱と煩惱とが衝突する。誰もがおそらく最初から人を殺そうと思った人はないのでしようが、いつの間だか自分が生きようとする和别人を殺さなければならぬ。他人を騙すつもりはなかったが騙さなければ生きていけない。そういうことになって来たのではないかと思うのです。

そうして現在、煩惱というものが良くないものだ、そうして「罪悪深重 煩惱熾盛」と。煩惱熾盛であるというところが、同時に罪悪が深重だということなのです。

煩惱を離れて罪悪というものが別にない。煩惱というものを良心の立場から見ると罪だということになる。良心によって、ある程度その煩惱の整理を、我々はおこなっている。怒りたいと思っても、良心に訴えて、怒ってもいいと思うときには怒る。ものを欲しいと思っても、良心が咎めるとものを盗らない。盗りたいのだけれども盗らない。それは世間の生活の中で良心のはたらきというものがある。おそらく煩惱と良心とは、それから罪悪ということとは、ズーツと関係しているのではないでしょう。そうしてみると現在生きている我々が罪悪深重煩惱熾盛である、どうとも動きのとれない自分であるということの奥には、根本的には良心というものが働いている。つまり良心は我々の煩惱の一番源までズーツと入って来てくれている。それが日常生活なのでしよう。

ところが我々は罪悪深重煩惱熾盛であるとは、我々は煩惱を持っているというのではない、朝から晩まで煩惱の中に我々はいる、もうこうなってしまったのです。最初は我々の中に煩惱が出て来たのかも知れませんが、いつのまだか我々が煩惱の水を飲んでいたのでなしに、煩惱の水の中に我々が生きているのである。そうなってしまう。そうなるともう我々のいのち全体が罪悪深重

なのである。我々が煩惱そのままだということは、同時に我々そのものが罪悪深重ということなのでしよう。そういう我々そのものを裁判するような良心は、普通の良心のもうひとつ奥の良心とでも言うべきものでしょうか。

個々のことがああだこうだと、腹が立つのが悪い、欲張るのが悪い、愚痴をこぼすのが良くないというのではない。そういうこと全部を引つくるめて我々全体が罪悪深重なのだと言ってくれる良心は、良心の良心とでも言わなければならぬものではないか。

煩惱の歴史を妙なことで言いましたが、よくお説教にも出る言葉の「五濁の悪世」とは、年限が経つにつれて段々世の中が濁っていくと。いろいろな濁りがズーツと満ち満ちて来ている。あの五濁の世の中というのは、まさに今のことであり、これからますますその方向に進んで行くことはあっても、このままでは後戻りして行くこととはないだろうと思えますね。

選挙の叫び声はなんののかんのかのいろいろな手段方法は考えられても、この世の中のことである限り、五濁の悪世ですから、あの声と騒ぎはますます激しくなることはあっても、軽く少なくなっていくことはないだろうと思うのですが、どういうものでしょうか。それが、ああい

う人達の、自ら進んでみんなの苦しみを代って、自分で背負って解決してやろうと思つて下さるお心であるだけに、尚更なんだか申し訳ないような、相済まないような気がする。

そういうと、なにかこの世とこの五濁の世とは離れて、別々に澄み切った静かな、騒がしい音のしない世界があるのではないだろうか。そういうものを願えば、それに対する希望を持てば、この世の暮らしが支えられるのではないだろうかとも考えられます。けれども、それならばそういう世界にいくまではどうなのだ。この世では仕方がないから騒がしい声は我慢しておこう、いや我慢どころではない、お鉢が回って来ればそう言っている自身も自ら進んで大きい声を、騒がしい声を立てざるを得なくなるのかもしれない。

それからですね、それを済ましてから、次の静かな、何の音もしない、清らかなつまり五濁を離れた世界へ行けばこれは安心なのだ、そういうことなのでしょうか。なるほど明日は日曜である。一週間の六日間の苦労はまあ苦労で我慢したけれども、明日は日曜だという土曜日の晩の心安さというのは、皆さんお互いによくよく身に染み込んでいますね。何といつても土曜日の晩はほつ

とする。明日は日曜だ、そういうようなものだろうか。七日目はいいが、六日間だけは我慢しなければならぬ。しかし、六日間の我慢がこれがとても我慢ならぬのが問題なのである。

六日間と日曜とが一つにならないものだろうか。六日間の毎日毎日に日曜が裏付けていてくれないだろうか。もっと進んで言うならば日曜日自身が月曜、火曜、水曜、木曜、金曜、土曜の中に働きかけてくれないだろうか。そうすれば日曜が来るのをわざわざ待つていなくても、毎日毎日がなんらかの意味で満たされる、心が安んずる。そうしてまたその日その日の暮しも一生懸命に出来る。何かそういうようなお約束がないものだろうか。

お話しのはじめに申しました、「永遠の中に消えて行くいのちが怖くて仕方がない」という私の気持ちの中には、もうひとつこの人生にはたった一度しか来られないということがある。昔はこういう思いはなかったのですが。言葉としてはわかっていた。長い数え切れない無限のこのいのちの流れの中に、たった一度しか我々はこの世に顔を出すことは出来ないのだということは理屈ではよくよくわかっていた。ああ、人生は一度きりだということ。元気を元気で言ったものですが、今に

なってみるとそれが何だかたまらない。もうすこしでこの人生からほっと外れ落ちると、もう二度とこの世に帰って来られない。なにか外れ落ちないで、もっとここに引っ掛かっておれ、お前ここに引っ掛かっておればズーッとこのままどこまでも持って行ってやるぞと、こういう何か手掛かりというものが無いのだろうか。そういう不安がする。

親鸞聖人は、そういう私のような寂しい悲観的な気持ちじゃあなしに、逆にですね、そういう一度しか来られないこの世で、本当にこの世からもう外れようと思っても外れさせない、本願の教えに出会ったのだという、そういう喜びを、「よろこばしいかな・・・、もうあいがたくしていまあうことえたり」（顕浄土真実教行証文類序）とはつきりおっしゃっていますね。

生まれ変わり死に変わってもいつ会えるかわからないこのお前のいのちを金輪際離さないという、つまり死ぬいのちに対して死のないいのち、死ぬということのないいのちにいま会うことが出来た。

日曜日になったら会えるのではない。日曜日にはデートしましょうと言って土曜日に喜んでいるのではない。

「いま会うことをえたり。聞きがたくしてすでに聞くことをえたり」。

いまもう俺は会ったのだ、会うことが出来たのだ。いまだころではない、すでにちゃんともう、滅びることのない声を聞くことが出来たのだ。このように親鸞聖人は力強い声でおっしゃっている、本願の御法に会ったことの喜びを述べられる。

未来になって、あの世に行ってから、そういうものに会うことの出来る喜び、明日会うことの出来る喜びではない。もういま現在この場でいま会っているのだ、いや既に会ってしまったているのだとこういう強い声でおっしゃっている。

私の若いころ、近角常観という方がおられました。何年かしか私は近角常観先生のお話しを承っておりませんが、その何年かですけれども、先生はいつでもお話しのある度に同じお話ばかりされる。もうそのご法座に来ると、先生がお口を開かない前から、こう見ていますと、もうそのお話しが先に聞こえて来る、こっちへ。そう聞こえて来る通りまた先生がお話しされる。それがまたなんととも言えない。こちらの体にただ染み込んで行くというのではない、染み込んで体が暖められる。

多分なんでしょうね、あの赤ん坊が毎朝配達して来る牛乳を飲むようですね。お母さんが温めて、さあ坊や牛乳が来たよ、お飲みなさい。お飲みなさいと言わぬ先に、もうお母さんがバタバタやっている、赤ん坊のほうがもう口を開けて待っている。そこへ温めた牛乳をお母さんがさっと飲ませてくれる。赤ん坊は待ってましたというようにゴクゴクゴクと飲む。もう飲むそのままが赤ん坊のいのちになるようである。それが毎朝毎朝同じ牛乳で同じようにお母さんが飲ませてくれる。もう昨日飲んだから今日は要らないじゃあないですね。毎朝毎朝の牛乳だけれども、毎朝毎朝新しい、いのちを飲ませてもらえる。

近角先生のお話は結局同じことばかり、具体的に言えば幾つか。それは十の種類もなかったのではないかと思うのですが。多くあっても七、八種類ぐらいではなかったでしょうか。

その中の一つ、いつも私忘れられない。まあ学生時代だからもちろん貧乏書生で困っていたという事で余計に応えたのかも知れませんが、借金のお話しです。おもに学生相手に先生がお話しされるときには、この話。金が無くて困っている学生が、友達に頼みに行こうか

と思うがどうも行きにくい。しかし困ることは困っている。そこへ親友が一人やって来て「お前どうも顔色が悪いのではないか。うん、分かった分かった。なんだか懐が寂しそうだな。よし心配するな。俺が引き受けてやる。お前の借金は俺が引き受けてやる」と、ぼーんと胸をたたいて、「俺に任せておけ」。そう言われたときに、なんとか「いやあ、君の世話にならなくてもいいのだ。俺だって今は困っているけれども、なんとか工面せんでもないので」とか言いたいのだけれども、そういうこともうどうともしようがなくなっているところへ。「いや、お前の困っている心の隅から隅まで、僕はちゃんと知っているのだ。見抜いているのだ。隅から隅まで見抜いているから心配するな。ああだ、こうだともう考える心配はない。考えたってお前できないではないか。出来ないのにまだなんとかしようとしてもそれは無駄なのだ。そういう出来ないのにまだしようと思っっているその心まで、わしは見抜いているのだ。だからもう無駄だ無駄だ。わしに任せておけ」と。

心の底の底まで見抜いている。

そういうときに近角先生はこういう言葉をよく使われた。「やるせないお慈悲」。自分の心を、困っている心を、

もう真つ暗になりそうな自分の心を隅から隅まで見抜いてくれる。そして、そのままでは放っておけないという心。それを「やるせないお慈悲」と先生はこういう言葉を使われた。

近角先生は近江の出身の方ですから関西ですね。関西ではその「やるせない」という言葉が抵抗なしに入ってくるのですが。なんだか私この東北に来てから「やるせないお慈悲」と言う言葉、「やるせない」という気持ち、皆さん方の間に平生こう生きて動いているのでしょうか。どうでしょうか。これは関西弁から出ているのだと思うのですね。

もう一つ。やはり学生相手のお話です。学生が下宿している。下宿で風を引いた。熱を出してうんうん言っている。すると下宿のおばさんが「これはすぐあなた、里のお母さんに知らせてやりなさい」と言った。そうすると学生は、「いや、知らせたいのだが知らせると母親が心配するから黙っていてくれ」と言っ、まだうんうん唸っている。一晩も二晩もそうして息子は意地をはっている。息子自身は意地だとは思わない。それが正しい思っている。親に心配をかけてはならぬと思っっている。下宿のおばさんがとうとう見兼ねて、黙って郷里の母親へ

電報を打った。今ならば電話でしようね。このごろ余り電報は利用されないようですが。

郷里からお母さんがとんで来た。

そうして息子の枕元へよって「お前、こんな熱を出して何日も苦しんでいるのに、何故もつと早く言わなかったのか」と。「いや、お母さんに心配かけては済まぬから」。「何をお前言っているのか。お前がそのように母親に心配をかけては済まんと思っているような、そういう心そのものもお母さんはちゃんと知っているのだ。そんなことを思ってもお母さんの心には何も意味がないのだ。お前は一所懸命意味があるように、いかにも孝行息子らしいつもりで思っているのかも知れないけれども、そうじやあない。そんなことは全く意味がないということ。そういうことまでも見込んで、そうでなくても日ごろから便りがながい、病気でしているのではないだろうか」と心配しているのだが、案の定そうだ。何故もつと早く言つて来ないのだ」と、こう言われたときに、息子が初めて、「ああ、そういうお母さんのお心でしたか」と。

この病気の子と母との関係、そして先の借金の問題、これをいつも先生がおっしゃる。

ところがですね。その借金の話ですが、今度初めて私

気がついた。このお寺さんでお話しさせて戴くことで、この話を思い返しているうちに、はつと気がついたのは、近角先生はですね「よし、君はどんな借金をして困つていても引き受けた。安心しろ。俺に任せておけ」、そこまでは言われる、ところがだからと言って、「さあ、これで払え」と言つてお金を渡してくれたかどうかということ、近角先生ちつともおっしゃったことがない。これ私毎年聞いておりながら、またこの話をしよつちゆう友達などにも話しながら、お金を貰ったか貰わなかったかということに、近角先生はなにも言わなかったことに、今度初めて気がついた。愚かなものですね。つまり、有難うございました。友達の気持ちを聞いて有難うございました、お慈悲を戴いてそれで「有難うございました」と端的にそこに出る。

「明日お金をもつて来てやるから」と言われて、それならお金を見てからお礼を申しませうと言うのではない。あの世へ行けるから安心しろ、それじゃ有り難うございました、と言うのではないのでしょうか。いま、いま、いまのお救いである。

「いま会いがたくして、いま会うことをえたり。聞き

がたくしていま聞くことをえたり。」

聞いたらどうなりますか。この世でお救いに預かったならば往生は間違いないのだ、往生をさせて戴けるならそれは有難うございます、じゃあないらしい。

近角先生が、「借金を引き受けた」とおっしゃったが、「さあお金をやる」と、「そのお金を受け取った」と先生が言った覚えは僕はない。それをいままで気がつかなかったが、今度初めてこのご縁でそのことに気付かせて戴きました。

近角先生も多分あの世で、「うーん、なんてやつら、分らない奴だったろうな」、「今になってそのようなことを言っているのか」と、おそらくあの世でおっしゃっているかと思いますが。

いや、「あの世」と言ったら申し訳ないかも知れない、実はここに、このすぐ後ろにおられる。いや実を言うと皆様方のお心の中に、みんな近角先生が一人一人働いて来て私の顔を見ていて下さるのかもしれない。

つまり、お前が病気になつていてそれが可哀相だ、病気になつても尚それを親に隠そうとしているその気持ちがお可哀相だ。そういう「はからい」は一切捨てて、そんなこと何も意味がない、わしは駆けつけて来て枕元

へ座つたのだから、もうお前は安心したらいい。これは明日のことではない。日曜日のことではない。現在、ここ、今のことなのである。

母親という仏はあの世で会える仏ではない。いま現在我々に声をかけていて下さるお母さんなので、母親という仏はあの世で会える仏ではない。いま現在我々に声をかけていて下さるお母さんなのでしょうね。私たちはそれを知らないから明日ならば良いだろう、今日はこれではないが、明日ならば明日ならばと、明日へ明日へと気持ちを延ばして行く。お母さんのほうはそうじゃあない。今、今、今として子供を思っていてくれる。その今のお母さんの心に気づかせてもらえることなのでしょう。そういうお母さんの世界が、現在この世界と離れないで一つにある。

選挙運動がある時期を経てだんだんよくなつて行つて、あの世では静かな世界になるのだ、というのではなく、現在のこの騒がしい世間そのままに、そういう世間を包んで、それと離れないで親心の世界がある。

この世を離れないであの世がある。現在のこの五濁の世を離れないで、そのままそれと一つにお浄土がある。お浄土からの呼び声は瞬間瞬間に、だから日、月、火、

水、木、金、土曜日の毎日毎日にお呼び声がかかって来る。聞き忘れてしまうと、土曜日になって初めて、明日日曜日の声を聞いて楽しもうとしている。

お浄土はこの世と離れないでこの世と同時にある。この世と一つにある。仏様は私らと一つにある。母親は子供と一つに生きている。母親の住んでいる世界と子供の住んでいる世界とはたしかに違う。違うけれども離れておるのではない。一つである。いつも母親の世界は子供の世界を包んでいる。

親切な友人の心は、借金をもって苦しんでいる、私そのものを包んでしまっている。離れていない。それがいわゆる友達の声を聞いて、「有難うございました。そこまですの心を見抜いてくれたあなたであるか」と、「そこまで自分のことを夜昼心配してくれたお母さんの心か」と。お母さんの声を聞いたときに「有難い」と出る。

だから「聞くこと」が即ち「信ずること」である。

お母さんを信じてやろうと思つて信ずるのではない。お母さんを信じようなどと夢にも思つていなかった。信ずる心の少しもない、微塵も我々の中から信ずる心は出て来ない。そういう信の全くない我々を、信の世界が、

お母さんの心包んでいる。五濁の悪世の、この現在の世界の、この中には何一つまともなものはない。まことのものはない。かけら程も真実なものはない。そういう世界を真実の世界がそのまま包んでいてくれる。そういう現世を離れないで、この真実のものがない世界を離れないで、真実がそれを包んでいてくれる。それによつて我々は生かされている。

その「母親の声を聞く」、「友達の声を聞く」ということですが、親鸞聖人は法然上人からどういうようにお聞きになったか。

皆さんもよくご存じの通り、「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとの仰せをこうむりて、信ずるほかに別の子細なきなり」と、あの有名なお言葉ですね。

「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」という法然上人のお言葉を、親鸞聖人がそのまま言つておられる。「親鸞におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひと（法然上人）の仰せをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり」と唯円房におっしゃっている

。唯円房はまた『歎異抄』を通して、私達に「親鸞聖

人はただ念仏して・・・」と法然上人から聞いたことを、そのまま私（唯円）に伝えて下さいましたと唯円が今度は私達に伝えてくれている。

みな「聞く」「聞く」ということの他に、つまり法然上人のお言葉が、そのまま親鸞聖人のお言葉になり、親鸞聖人のお言葉がそのまま唯円さんのお言葉になり、そこまではいいが今度は私自身の番ですね。それが私自身の言葉になるかどうかが問題なのでしょうね。

そこで「聞け。聞け」とおっしゃる。これもよくご存じでしょうが、大谷大学の曾我量深先生のお話です。聖典を読むというのは、読んで勉強するのではない、「読む」ということは「聞く」ことなのだ。読む目的は聞くことにあるのだと。このことをよく言われる。本を読むということは自分にそれを聞くことなのだ。つまり聞くところまで行かなければ、本当に読んだということにはならない。本の中の言葉が、それを読んでいるうちに自分がそれを聞いて、その聞いているままが、今度は自分の中に生きて来る。するといつの間にかその本の中の言葉が私自身の言葉になる。そこまでならなければならぬ。つまり、読んだものが人になる。聞くことを通して人になる。

ちよつとこう申してはどうかと思いますが、三人か五人集まってお互いにおしゃべりをしますね、おしゃべりし合っているのだが、誰も聞いていないというおしゃべりがよくある。えらい熱心に話しておられるが、何を話しておられるかと思つてそばに行つて聞いてると、話している人は一所懸命話しているが、他の人は誰も聞いていない。いやこれは人ごとではない、今日のお話し自身もそうかもしれない。（笑い）

みんな自分が言おうと言おうとしている。だから一人の人が、「昨日はこういうことがありました。私はこう思いました」と言つて言い終わらぬうちに次の人が「私は昨日こうでした。ああでした」と言おうとしている。我勝ちにみんな自分がおしゃべりしようとするから、誰も聞こうとしていないというおしゃべりが案外ある。これはもうおしゃべりがすんで解散したらそれっきりですね。それはおしゃべりした人は胸につかえていたのを大分しゃべったから、ほつとしたと思つているかもしれない。お互いにほつとし合うという点ではこれは無駄でないかもしれない。

けれども、せっかくみんなが集まっておしゃべりしているのなら、なにかそこからそれによつて自分が養われ

るものが生まれると有難いと思えますね。つまり聞くことによって自分が養われるということは、聞くことによって人が変わるといふことなのである。

親鸞聖人が、「ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべし」との法然上人のお言葉を聞かれて「ああ、そうでした、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」と唯円さんにお話しになったときには、聞く前の聖人と、「法然上人がおっしゃいました」と言われた聖人とはもう違っている。新しい親鸞聖人がそこに生まれておられる。そう言っているのではないかと思えますね。聞くということは単に耳に聞いて納得した、まあ「納得した」でもいいですけども、何か物足りない、何が納得したのか。聞くことは、聞くことによってその人が新しく生まれ変わることである。

「ただ念仏して」というこの一言。「ただ念仏して」という一言を法然上人から親鸞聖人が受け取って新しい親鸞聖人が誕生した。それをまた唯円さんにお伝えになつて唯円さんが「念仏して」と聞いたのだと。その「ただ念仏して」が唯円さんの心に生きたときに新しい唯円さんがそこに出て来ている。その唯円さんの言葉を今度は私達が「ただ念仏して」とさあどう聞くかということな

のですね。どう聞くかということ以外になにもない。・
(テープ中絶)

信じるか、信じないかという力がこっちにある訳ではない。「信心というは深く人の言葉をたのみてうたがわざるなり」(唯信抄文意)。それが信心ですから、その信心がお救いですから。念仏と往生とは同時なのだ。念仏してあの世で往生ではない。念仏と往生とはひとつなのである。

その場合、新しく生きられるその原動力は言うまでもなく念仏の方にある。そういう念仏は、この現世をどこ探してもないですね。世界中どんなに駆け回って探しても、たとえばあの選挙運動の中から念仏のかけらでも出て来はしないかとほっと思わせられることもあるでしょうが、しかし少ない少なくともないように思う。聞こえない。

これはどういうことなのでしょう。そこでは、本当に生きて行くという原動力から縁を切って、生きている原動力を無視して、自分は生きているのだということだけにこの世を作り上げて行こうとしている。借金ばかり背負って我々困っている、それをやり繰りしようとしているいろいろな知恵才覚をもって事業を起こしたり、経

営をしたり、とくにそれが食い違つては戦争までやってみて工面しているのだけれども、さてどうなつて行くのか。

原動力はそこからは出て来ない。そういうものを包んで、離れないで、それを終わつてからこつちへ来いというのではなしに、それそのまま、それを包み込んだそういう力そのものが本当に我々のいのちを支えてくれる力になる。あるいはこの世そのものを毎日毎日新しく作り上げて行つてくれる力であるはずなのである。

その意味での、この世とあの世とのつながりは「聞く」ということなのである。「ただ、念仏して」という、ただそれだけを聞くことなのである。その中に我々の新しいいのちが、この現在の政治経済そのものを根本的に作り直して行く世界が、そこから生まれて来る。

まあこの世のことを悪く言い過ぎたようでございますけれども、親鸞聖人はもつとひどいことをおっしゃつておるようです。

たとえばよくこれもご存じのとおりに、王舎城の悲劇ですね。つまり弥陀の本願というようなことは何だか夢物語のようだけれども、それを知らせてくれるために現実に我々の人間の歴史の中でこういうことがあったのだ

と、こう現実の歴史の事実を述べておられる。それがあの王舎城の悲劇ですね。

王様の皇太子が自分の父親母親、両親の王様を殺したり痛めたりした。王舎城の悲劇として有名な話ですが、これを親鸞聖人は、親を殺すというような救われようのない悪逆無道な、その意味では五濁悪世の代表でしょうね、そういうお陰でかえつて、そのような五濁悪世を象徴したようなものそういう者も救われるのだという、弥陀のお力を我々に知らせてくれるための悲劇だったと。この王舎城の悲劇をなんだか非常に有難がつているように受け取つておられる。

ちよつと聞くとこれはけしからぬことのように思われますね。ああいう歴史的な事実、そういう皇太子をわざわざこの世に生まれさせて、しかもそれが最後にお釈迦さんのお教えにしたがつて救われるのだという、この歴史的な事実をそこへ持つて来て、この有り難さに気がつかない本願の大きな力を我々に気づかせてくれるために、ああいう悲劇が出てきたのであると。

そう考えられるならば両親を殺した皇太子は仏様のお使いである。わざわざ頼まれもしないのに自ら父親殺し母親を牢に入れるという立場になつて、これでもしかし

救われるのだということを、五濁悪世の現在の我々に示してくれるためにわざわざその難儀を引き受けてくれたのだ。こういうように言っておられる。

ちよつと選挙運動とにているような気もするし、何だかどこかではずれているような気もしますね。我々の代わりに苦勞してやろう、自ら引き受けて苦勞してやろうと声を囁らして言つて下さる人達。ところがこれは親鸞聖人がそのようにおっしゃつているのですが、現在我々の周囲にもやはりそういうことを申しておられる方がある。

最近よく新聞で問題になつております身体障害児。この方は二十年ほど前に赤ん坊のときに種痘をし、その後脳炎を患つたのですね。種痘直後の患いというのはいろいろ問題があるらしい。脳炎を患つて小兒麻痺になつた。生後何カ月かは達者であつた坊ちゃんが種痘した後に脳炎という病氣にかかつて、その後遺症に小兒麻痺になつた。一生口もきけない。歩くことも出来ない子供になつた。それを十九年間もズーツと看病して来た記録が今出版されていますね。

この人のご主人が全国障害児対策の会長になつて二、三日まえの新聞に、島田療養院のストライキとかなかで出ていましたね。そういう施設を国で建てさせるよう

に運動をして実現された方ですが。その人の書いておられるのに、子供をこのように病氣にさせたのは母としての責任であるとしてこう言つておられる。

「あらゆる角度から人生を教えてくれました。この小兒麻痺の子供に感謝すると共にこの坊やを通して教えて下さつた大いなる力に手を合わせた気持ちはです」。それから「周囲の人々のいままで励ましてくれたことにお礼申します。．．．この小兒麻痺の子供を持たせてもらったお陰で、私が本当に人生に目を開いて立派にこういふように生きることが出来た。その償いをどうしたらいいか。坊やの顔を見ると、坊やの目はこういふように言ふと、坊やは笑顔で『世の中の障害児がみんな幸せになるようにしてくれることだよ』と、こういうように坊やの目が自分に言つていふようだよ」とこう言ふ。

こうなると単なるいわゆる有難いという感謝ではないですね。もう感謝そのものが現実にお浄土の力がそのまま現実のこの娑婆の世界の中に入り込んで、娑婆そのものを作り変えてきている。

繰り返して言うようですが、娑婆の中だけでどんなに大きな声をたてても娑婆は改造できるだろうか。娑婆を包んでいてくれる大きな力が、そのまま現実にですよ、

死んでからではなしに、いまそのままこのお母さんを通してこの世に働いて来てくれている。

もう一人のお母さんはこう言っている。「うちの重障児の子は私の家の宝です、この重障児の子が。これで私は一生懸命に稼いである程度財産もできました、この子のお陰で人生の幸せということを教えられました。子供へのお礼はこれから社会のために尽くさねばなりません」とこうおっしゃっている。つまり障害児が立派な人づくりをしてくれている。

この障害児を持たなかったならばこの二人のお母さん、その他いろいろたたくさんのお母さんがおられるようすが、ただ普通の自分のことだけに明け暮れしたお母さんにとどまったかもしれない。ところが自ら進んで社会の中に立ち働いてこの社会を新しく作りあげていく力になり得たことの喜びを感謝しておられる。この子供のお陰だと。

これと先程の王舎城の悲劇とはなんか関連があるような気がする。くどくどといろいろ申し上げましたが。最後に、これも妙好人のお園さん。皆さん方もよくお聞きになってお話しだと思えますが。

妙好人のお園さんというのは三河の人らしいですね。

ある人が、「私は弥陀にたのむというひとつでお助けにあづかっています」。「たのむ一点張りで、たのむ、たのむの一点張りで仏さまに救われております」とこう言った。

そしたら、「たのむ者が救われるなら、たのまぬ者はなお救われましょう」と、こうお園さんはぬけぬけと言った。ぬけぬけかどうかはこれは私が勝手に言ったのですが。自分がたのむというこんな世話は余計なことだ、お母さんに心配かけないなどということとは全く余計なことなのだ。「たのむというようなことを、こっちから心配しないでいいお助けが嬉しいございます」と。

それからまた、「あなたのご安心はどうですか」と聞いた人がある。

「やってもらいますわいのう」。

「やってもらいますわいのうだけじゃあ何だか抜けているぞ。もっとしっかり聴聞しなければ駄目ですよ。ただやってもらいますわいのう、だけでは駄目だ。もっと真剣になって聞かなければ駄目ですよ」と、またある人がそう言った。

「有難うございます。嬉しゅうございます」

「あなた、そう言ったって。そんなことを言っていた

のでは、あなた落ちてしまうのに、何が嬉しいのだ。しっかりと聞いて頼むということもしないで、それでは落ちてしまうぞ。落とされてなにが嬉しいのか」と、こういうように言われたところが、

「落ちればこそ、やってもらいますわいのう」。

「そんならばあなたは毎日お慈悲で嬉しい日暮をしているのですか」と、こうまた押しして聞いたところが、

「ご恩や、お慈悲はなんともない」。

朝から晩まで母親は子を思っているけれども、子が朝から晩まで母親のことを思っていたのではこれでは学業もおろそかになってしまう。

「ご恩やお慈悲はなんともない。わたしはいつも火事場の真っ最中です」。お園さんはこう応えた。

その通りでしょうね。この世はまったく火事場なのである。朝から晩まで車で声を嗶らして走り回らなければならない。そうでなければつとまっていかないこの世なのである。

最後にお園さんが亡くなるときに、「あなたのご安心は」と聞いたたら、「私に領解もなにもない。私にはなんのわかったもわからぬもない」。一生の間ただ無駄骨を折っただけじゃわいのう」。

「ただ念仏して弥陀にたすくれまいらすべし」 「ただ念仏して」とういうだけのほかに、なにを無駄骨をしたこの一生涯なのだろう。
どうも有り難うございました。

（真宗大谷派では二十数年以前から、毎年一回同朋大会を開催し講師を招いては全県下から 僧侶や一般の方々が多数参集し法話を聴聞しています。本稿は昭和四十九年六月二十三日 石鳥谷町 長楽寺で行われた同朋大会に招かれて話されたものです。松生先生は七十五歳、北上市村崎野にお住まいのときのことです。）